



つづく つながる 夢を育てる学び舎  
**国立二小だより**

令和6年(2024年)6月28日

国立市立国立第二小学校

校長 内田 辰彦

「失敗を楽しむこと」を鍛える

校長 内田 辰彦

1学期も終わりに近づき、各学級では今学期のまとめの学習・活動を進めているところです。7月の終わりには、通知表をお渡ししますが、お子様の学校生活の様子につきましては、夏休みのはじめに予定されている個人面談の中で学級担任からお伝えさせていただきます。4月当初の新しい学年・学級での様子から大きく成長した今学期の子どもたちの姿を保護者の方と共有していきたいと考えています。

5月から6月にかけて、全ての学級での学習の様子を1時間ずつじっくりと見る機会がありました。どの学級でも生き生きと学びに向かっている子どもたちの姿を見ることができました。ただその中で、よくある光景として、先生が子どもたちに発問を投げかけると挙手する子とそうでない子がいるなあと、感じるがありました。一方でたくさん手が挙がることもあります。答えやすい問いと答えにくい問いがあるのだな、と思いました。また、難しい問いには答えづらいたらうとも思いました。ただ、そのあまり手が挙がらなかった難しい問いについて、近くの人と話し合ってみよう、という先生の指示があると、手が挙がらなかった子も、近くの子とその問いについて話し合い、自分の意見を出していることもあります。

なかなか、人前で発表するのは、間違ったらどうしよう、と心配になるものだなと思いました。大人でもきっと同様の感覚になると思いました。そんなことを感じているときに、新聞で「失敗を楽しむ脳」という見出しの記事を読みました。最近の脳科学の研究の中には「失敗や逆境がある時こそ、成功した時により強い幸福感が生まれる」と考えられているということです。インターネットの普及で、すぐに検索ができ、知らないことや分からなかったことはすぐに調べられるようになりました。また、AIを使うといろいろなことが簡単にできるようになっています。また、だれしも失敗は嫌だなあと感じるものです。ただ、失敗したりピンチになったりしたときに、それを乗り越えるとより強い幸福感を感じることができるのは、人間の素晴らしい特徴なのだと記事を読んで思いました。

昔から失敗は成功の基、であるとか、ピンチはチャンス、であるとかの言葉があります。失敗は嫌なことであるとばかり捉えず、成功の基である、チャンスの基であると捉えることができればきっと、失敗を楽しむことができ、成功に導く道筋が見えてくるのかもしれない。

いつもの授業の中には、自信がないこともたくさん出てきます。正解だと確信をもてないこともたくさん出てきます。でも学校を卒業して世の中に出ると、自信がもてることや正解だと確信できることの方がむしろ少なく、ほとんどが手探りで自信がもてないことがたくさん出てきます。そんなときに、失敗を楽しめるようになっていけば、それはその人の大切な強みとなると思います。これからの時代は不安定で不確実な時代と言われています。そんな見通しの持ちにくいときだからこそ、失敗を楽しめる力は大切だと考えます。考え方を180°変えれば、成功は難しいけれど、失敗ならいくらでもできそうな気がします。そして失敗したことを少しでも楽しんで、いつか訪れる成功への道筋が見えればいいなと思います。

1学期が終われば長い夏休みです。夏休みにもたくさんの体験・経験ができると思います。失敗を恐れず、いろいろなことにチャレンジしてほしいと思います。



ぶどう棚越しに見える、ピオトープで遊ぶ子どもたちの様子